縁

松木　健一
学校法人専修大学理事長

想い返せば多くの方々に出会い、その縁で人生を歩んできたように思う。特に中学から始めた剣道は、高校、大学、社会人と人生の節目に様々な、そして大切な出会いを与えてくれた。

専修大学卒業後、山形県出身の榎本正義剣道範士との縁でそのまま東京に残り、就職したが、その1年後には退職をすることにした。倫敦(ロンドン)で生活することを決断したからである。昭和49年のことであった。

大学生の頃から諸外国を見てみたいとぼんやり考えていたが、就職後も海外に行く夢を諦めきれず悶々とした生活を送っていた。

そこで学生時代に懇意にさせて頂いていた専修大学の中田武司教授、中田幸子教授ご夫妻に相談したところ、両先生は、「外国に行くなら勿論、英国でしょう。文化、社会、政治等学ぶことは多くあると思いますよ。若いうちに行ってらっしゃい」と励ましてくださった。そこで自分の将来にとって極めて貴重な体験になると自らに言い聞かせ、渡英したのである。

倫敦到着後は戸惑うことばかりであったが、まずは生活に順応することに集中した。

しかし当時は円に比べ英国ポンドの価値は高く、数カ月後には生活費用の心配をしなければならなくなったのである。

そんな状況を救ってくれたのも剣道が取りもつ縁であった。在英国日本人の登録をするため日本大使館を訪問した際、窓口の係員から何か特技がありますかと尋ねられ、学生時代に剣道4段を取得したと答えたところ、是非お会いしてほしい方がいると告げられた。後日、再度訪問した際に面会した方こそ、菊地光一一等書記官であった。菊地さんは、剣道七段で当時、文化担当の職も担っていたのだと思う。1年後に第3回世界剣道大会がミルトン・キーンズで開催することが決定していたこともあり、英国人の剣道愛好家との稽古に参加してくれないかと誘われた。倫敦の地下鉄「エレファント&キャッスル駅」の近くに

ずいそう Occasional thoughts

英国人が開いた「Nenriki(念力)道場」があるので、夕方の稽古に来てくださいというお話だったので1週間後に訪ねてみると、長年に亘り英国で剣道の指導をされている、佐賀県出身で法政大学を卒業された藤井興満氏にお会いした。藤井氏の指導により、英国人選手たちの基本的な礼儀作法、所作、稽古の方法等は確立されており、来る世界大会に向けて、強化できる可能性は十分に感じられた。道場はエレメンタリースクールの体育館であった。稽古後は近くのパブで剣道談義に花が咲き、侍の歴史、日本の文化、茶道や華道等多岐に亘る質問攻めにあった。そうした質問に答えることができるよう懸命に〝オン・ザ・ジョブトレーニング〟を行ったおかげで、私自身も語学、文化、習慣、気質、ビジネスなどを改めて理解することができた。良い研修の場であったと思う。こうした「縁」は、帰国までボランティア活動という形で続いた。

その後、活動の拠点を倫敦から英国西部の港湾都市ブリストルに移したが、ここでも新たな出会いと発見があった。地方都市での生活から見えてきたことは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからなるこの連合王国には、それぞれの言語や文化を大事にし、自らのアイデンティティを守り抜こうとする人々がたくさんいたということである。彼らに接することでさらに自身の学びの輪を広げることができた。

こうした経験をさせてくれた父母、兄弟、恩師には感謝してもしきれない。この時の海外生活で得た知識と体験こそ私の財産であり、今の私の支えとなっている。

帰国後、「縁」あって母校専修大学に奉職する機会を頂いた。一昨年、理事長に選任されたのも、1つの「縁」と言えるかも知れない。

今後も「縁」を大切にしながら、厳しさを増す大学経営の基盤の強化に向けて、与えられた役割を果たしていくことが「縁」を頂いた方々への恩返しになればと考えている。